

保育園での食事場面における1,2歳の子どもの拒否行動の検討

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
青木 美穂

本研究は、食事場面における1,2歳児がどのような拒否行動をしているのかを明らかにすることを第1の目的とし、その拒否行動に保育士がどのような工夫をしながら対処しているのかを明らかにすることを第2の目的とした。こども園の1歳児クラス計24人を対象に計13回参与観察を行った。ビデオ記録から子どもと保育士のやりとりを文章化し、それをもとにエピソードを抽出し分析した。その結果、子どもが保育士の摂食促しに対して示した拒否行動は、①身体拒否②吐き出す③手を舐める④言語拒否⑤無反応⑥寝たフリ⑦泣く⑧泣いたフリ⑨その他の9タイプに分類された(目的1)。また、分類された拒否行動のうち、特に身体拒否が多く見られた。研究を行ったこども園では、まだ食事を一人で食べることが難しい低月齢児たちには、保育士の働きかけは必然的に多くなり、多くの働きかけがあることにより、子どもの拒否行動が引き起こされている可能性が考えられた。次に、保育士が子どもに摂食促しをする際には、8つの工夫が見出された(目的2)。その中でも<褒めて、その子にとって近い関係の人に見てもらおう工夫>や<乾杯をすることで楽しい雰囲気作りをする工夫>のように、子どもの主体性を尊重すること、次に子ども自身が判断して楽しい気持ちになるようにすることの2点が重要な点でないかと考えられた。